

「何があっても切れない関係」

～神の恵み＝福音に生きるとは？～

「あるいは、私たちがどこにしよう、たとえ空高くのぼっても、地の果てまで行こうとも、私たちの王なるイエス・救世主^{キリスト}によってはっきり示された神の愛から、私たちを引き離せるものは、何一つないのだ。」ローマ人への手紙8章39節[ライブ訳]

パウロが悟った神の愛とはどんな愛だったのでしょうか？

先週の金曜夜になされたユース・クラブ・アップという若者たちの集会でルカ15章が開かれましたが、今回の聖書箇所と合わせて、神様の愛の大きさについて考えさせられました。イエス様はルカ15章で三つのたとえ話を語られましたが、一つ目が100匹中1匹。二つ目のたとえ話では、10枚の銀貨のうち一枚を捜すお話。そして、最後に「放蕩息子」のお話で、2人の息子の内の一人が失われて、帰って来るというお話とどんどんその数が小さくなっていきます。今朝の聖書箇所では、「たった1人の息子さえ惜しまずに、死に渡してしまわれたほどの神が、そのほかすべてのものを与えてくれないわけがあるか？ローマ8章32節[ライブ訳]」と表現されています。神様の愛は、100分の1でもなく、10分の1でもない。また、2分の1でもなく、1分の1なのだ！とパウロは語りたかったのではないかと思います。

9章ではパウロはイスラエル人たちの選民思想について語っています。そのことから、民族として選ばれたイスラエルの立場だけではなく、信仰によって選ばれた私たちについても語っていきます。私たちは信仰によって神の子とされたのですが、それは私たち自身の努力ではなく、一方的な神様からの恵みであるのだ！と強調しています。神様による選びの素晴らしさを語り続けました。イスラエル人たちは、自分たちの選びをいつの間にか血筋によって得られたものであり、自分たちは特別な存在であるという間違っただけのプライドを持つようになりました。その結果、神様の純粋なことばに聞き従うことをしなくなり、自分勝手に神様の御心を判断するようになってしまいました。その結果、神様の真の恵みからもれて、自分の頑張りだけで生きて行くようになってしまいました。いわゆる、彼らと神様との関係ではなく、自分勝手な宗教を作り上げてしまったのです。

これは私たちクリスチャンたちに対しても大切な警告であると思います。私たちの信じる福音(ゴスペル)は素晴らしい！と相手に対する配慮や愛が欠如した状況で押し付けてしまうならば、それは真の福音(ゴスペル)ではなくなってしまいます。福音(ゴスペル)とは、そのすばらしい内容と、それを伝える私たちの信仰とが一体となった時に、本当の福音(ゴスペル＝良い知らせ)となるのではないのでしょうか？自分が語っていることが正しいからといって、他人を裁いてしまっていたら、その正しさが正しくなくなってしまいます。ぶどうの幹であるイエス様から離れた状態で福音(神の恵み)に生きることはできないのです。